特集 基礎学力を問い直す

教育機器を利用して基礎学力の定着を進める

高木浩志
（兵庫県宝塚市教育委員会）

新教育課程の実施にあたって

今年度は新教育課程の最初の実施年に当たり，また英語科が必修教科になったことで，英語科の先生方は大変な１年だったと思われる。一方で，「指導と評価の一体化」ということで，「絶対評価」の導入に当たっての苦労も並々ならぬことも現場の先生方のお話や研修会の中での感想からも伺える。宝塚市教育委員会でも，委嘱研究会の中で，現場の先生方と「指導と評価の一体化」の研究を進めている。国立教育政策研究所作成の評価規準より評価基準表を作り，研究授業を実施して生徒の評価を進めるという流れであった。この研究の成果は，宝塚市での研究発表大会で発表され，研究紀要としてまとめられることになっている。

さて，もう１つ今年度の中で問題になった「学力低下」について，「ドリル学習」か「体験学習」かという選択において，英語科の中で考えた場合は，両方必要であるという結論が導き出されると思う。英単語・熟語のドリル学習や文法の学習も大切であるし，ALT 等に指導されるペアワーク等の実践的なコミュニケーション活動も重要である。しかし，新指導要領の中では，英語科の週時間数は３時間に減っていることで，より効果的な指導が求められている。ここで，英語科の基礎学力を定着させるために利用が有効と考えられるのは LL やコンピュータを始めとする教育機器である。

1. LL の利用

LL は，英語学習と切っても切れない縁がある機器である。私が中学生の時代にも設置されており，英語の学習時にはよく活用したことを覚えている。高校や大学時代にも使った記憶がある。対象が個別，グループや全体というように分けて使うことができる。一般的には対話練習によく使い，ビデオや OHC などの視聴覚機器とアナライザーを合わせて使うことにより，効果をあげることができるのである。最近では，ALT とのティームティーチングでの利用をしたり，コンピュータを合わせた LL システムも登場しており，生徒たちが興味を持ちながら，短い時間での効果的な学習を進めることができる。活用例としては以下のような場合がある。

（1）OHC の利用

（例：本文の一部を隠しての音読練習から暗唱へ）

音読練習をさせた後で，OHC を利用して，本文の一部を隠しながら，音読練習をさせていく。最終的には，暗唱へと導いていくことができる。音読練習をしている様子を LL に備え付きのカセットデッキで録音し，それを生徒にモニターして聞かせることで，間違っている点が把握できる。

（2）カセット，MD，ビデオカメラの利用

（例：教科書の対話からオリジナルの対話活動へ）

教科書の内容を理解させた後の段階で，録音された会話の内容を音読練習させる。生徒のそれぞれの様子をモニターして，発音やイントネーションのチェックもしっかりとする。最終的には，テープの会話の後で，次の内容が言えるような段階まで高めることが大切である。次に，教科書を参考にオリジナルの対話を作成させ，ビデオカメラで撮ったり，テープ等に録音したりするような応用にもつながる。

（3）ビデオの利用（例：映画の活用）

映画は，教科書の中よりも生の会話を画面や音声を通して味わうことができる教材である。教科書の内容に合った映画を利用することにより，より教科

書の内容理解を進めることができる。私はよく教科書の読み物の内容に合った映画と，その映画の原作やシナリオを探しに行ったものである。映画で，適当なシーンとセリフの生の場面を見て聞き，英書でそのセリフを確認するという作業を教師の準備段階として果たしていた。生徒には，最初に映画を見せて，内容を理解させ，それからセリフをテープにとり，音読練習に利用した。また，OHC を利用して，セリフの中の適当な場所を穴埋めさせるような問題を出したりもした。アナライザーを利用しての内容のチェックに利用することもできる。ビデオの単独での利用も教室でよく行われている。

(4) CD や MD の利用（例：音楽の活用）

英語の音楽は英語のリズム，イントネーションや発音を学ぶのによい教材でもある。教科書の中にも，ビートルズやカーペンターズ等の曲が取り上げられている場合が多くなっている。これらの音楽を探し出し，MD に録音して，教材として利用する。昔はテープに録音していたが，巻き戻しに時間がかかり，苦労をした思い出が多い。しかし，MD を使うと，一発で選曲できる。バーコードリピーターという CD 装置も活用できる。音楽は，授業の流れの合間に入れたり，ほっと一息つける場面で使ったりして楽しむことができる。生徒たちも好きな曲を何回も聞きたがり，歌詞も覚えてしまう。教師も歌を生徒と一緒に歌う時も必要である。教室内での利用も多い。

(5) アナライザーの利用

(3) でも触れたが，多岐選択問題に利用ができる機械である。アンケートや設問を出す際，生徒の回答を瞬時に把握することができる。昔は，教室の前に番号のランプがつくようになっていたが，最近はなくなっているようである。

2. コンピュータとインターネットの利用

インターネットの爆発的な広がりによって，コンピュータの利用は進んでいる。総合的な学習の時間や選択教科学習での発展的な学習の場合にも，利用されていることが多い。英語科の中でも，活用される場合が増えてきた。昔はドリル学習にコンピュータが使われていたが，現在ではコミュニケーションの手段としての利用がほとんどになっている。

(1) 電子メールの利用

昔は，電話か手紙でしか海外とのやり取りができなかったが，電子メールの発展によって，瞬時に安価にコミュニケーションを図ることができる。また，英語がわからない場合でも，翻訳ソフト等ができているために簡単にやり取りができるようになっている。しかし，手紙の書き方をしっかりと理解しておかないと，マナーに反するような文章を書く癖がつく恐れがある。英作文の能力もますます必要になると思われる。ALT との電子メールのやり取りの練習は，第一段階として，活用すべきであろう。

(2) ホームページの利用

ホームページの検索によって，様々な情報を得ることができる。それは，日本や英語圏のみならずに全世界の情報が得られるのである。一方で，ホームページを作成することも学習になる。私も選択教科学習の中で，取組んだことがあるが，英文でのホームページ作成は全世界向けのメッセージにもなるものである。これまでに学習してきたことを生かしての自分の意見やアイディア，そしてそれを掲載したホームページに対してのメッセージは，生徒たちにとっても生きた学習になるものである。

(3) テレビ会議

光ファイバーの進展やコンピュータの性能のアップにしたがい，国内を始めとして海外とのコンピュータを活用したテレビ会議が盛んになりつつある。お互いが顔を見ながらの交流ができるのである。国内にいながらも英語を使った学習ができ，海外での友だちも作ることができる。相互が行き合う国際交流も加われば，息の長い付き合いを進めていくことも可能である。ここで本当の英語学習ができる。

終わりに

英語学習も週 3 時間の授業だけでなく，選択教科学習や総合的な学習の時間等を利用するような幅の広い学習を進めていくべきである。教育機器をいかに効果的に活用できるかは，教師の腕にもかかってきているが，古いやり方に縛られるのではなく，意識改革をして進めていく必要性があると思う。